

中国の言論統制に対する一考察

卞 惟行*

Consideration of controls on freedom of Chinese press

Iko Ben

Abstract: According to the ranking of worldwide press freedom in 2009, which was done by the reporters without borders, the press in China ranks as 168th during 175 countries and regions in the world. (Japan ranks as 17th, Hong Kong 48th, and Taiwan 59th) However, there are such phenomena as misanthropy and conflicts between bureaucracy and people in china, which are more than the numbers can reflect.

Keywords: the ranking of press freedom, Chinese press, the reporters without borders

一、私の田舎、常州

昨年11月12日付、読売新聞夕刊に「格差のない豊かな町 常州」(河田悌一氏)という記事が掲載された。河田氏は元関西大学学長で、専門は中国思想史、キャンパスのある高槻市の友好都市というよしみで常州市を訪問し、「工業化、企業や農業の近代化は、1980年代から、共産党幹部と市政府の協力のもとで、きわめて戦略的に進められてきた。」と自らの“格別な印象”を述べ、副市長の「都市と農村の格差は存在しない」などの話を紹介し、「人口13億を超える中国全土が“都市と農村の格差”、“民族の対立抗争”を克服し、この豊かな常州のようになることができるのか」と賛美して締めくくっている。

私の田舎、江蘇省常州市は上海と南京の間にある中規模の都市で、ここ数年家を購入したこともあり、毎年1～2度は訪れている。

常州駅北側の地域は以前、一面の田畑であった。私の従兄たちは元々常州市中心部の非常に便利なところに住んでいたのだが、十数年前に地元政府から立ち退きを命じられ、当時まだ不便であった駅北側に移って来たのだ。続けて私たちも近くに家を購入した。決して治安の良いところではなく、近くに新疆からきたウイグル族が多くいるスラム街があり、従兄によれば麻薬や売春などで摘発されることもあったというが、やはり駅から近く、購入当時と比べ格段と便利になってきた。

しかし近年、時折駅北側の再開発が噂されるようになり一昨年、まずうちの近所から取り壊しが始まり、昨年夏、私や従兄の家も正式に取り壊されることが決まった。

二、70年代後半～80年代初め

私は父が中国人、母が日本人で現在は帰化したが、私が成人するころまでの日本の法律では、父方の国籍に属することになっていた。父は、(中国が言うところの)“解放前”¹に仕事で中国大陆を離れ台湾に行ったのだが、その後の内戦で大陸、台湾間には行き来が出来なくなり、8年間台

* 教養部講師 (非常勤)

湾で暮らした後、53年に日本にやって来た。当初は“中華民国”²の国籍であったが、主な親族が大陸にいるため、72年の国交正常化よりも前に“中華人民共和国”の国籍を取得した。

文化大革命時、中国の親族と連絡を取ることもままならず、自身の母親の死も、しばらくは分からなかったという。文化大革命後、中国領事館に親族訪問を願い出ても、却下され母国に足を踏み入れることは出来なかった。

しかし79年に私の母が、大連の大学で日本語の“専門家”³として教えることになる中国籍の私と父の入国も認められた。私は地元の中学に編入し、父は、34年ぶりに中国大陆の土を踏むことが出来た。我々は中国籍であるのに中国入国は許されず、皮肉にも“外国人の先生のご家族”ということで入国することが出来たのである。中国では、時として外国人の方が、簡単に事が運ぶことがある。私は、父と伯父とが再会を果たし抱き合っただけで泣いていた姿を今でもよく覚えている。父は79年以降も休暇を利用して親族訪問に訪れたが、必ずしも愉快的なことばかりでなく、80年には常州市郊外にある武進県⁴を訪問しようとした。未開放都市⁵へは、その地区の外事弁公室⁶や公安の許可が必要で、父も正式に手続きに行ったのだが、「なんで日本人と結婚したのだ!」、「奥さんを連れて行くのなら、訪問を認めない。」などの言葉を浴びせられ、憤慨した父は、結局行くのをやめることにした。

当時、私は大連のある中学校⁷に通っていたのだが、改革開放政策が始まったばかりのこの時期、外国からの訪問団もよく中国を訪れるようになり、地区の重点校⁸に指定されている私の中学にも、何度か訪問団が来たことがある。しかしその準備は大がかりで2～3日前から総動員で壁や窓ガラスを磨き、床を掃き清め、交流に参加する学生は、学校が選んだ（思想的に）優秀な学生ばかりで、一般の学生とは接触することがないように気を遣っていた。

中国に来たばかりで、ほとんど言葉の出来ない私はなかなか友人が出来なかった。まだ文化大革命が終わって間もなく、外国人や華僑が一般の中国人と付き合うのは容易なことではなかった。そんな中、ひとりの同級生が時折私に声をかけてくれ、私も少し学校に行くのが楽しくなった。彼は片足が悪く、いつも足を引きずるように歩いていたが、明るい性格で、すぐ彼とは打ち解けることが出来た。ある日彼と担任が言い争っている光景を目にし、彼に尋ねると“なんともない”と言ったので、あまり心配していなかったのだが、私が高級中学に進学すると、学校にもう彼の姿はなかった。どうしても会いたくて、彼の通う別の高級中学まで行き再会を果たすと、障害者である彼は、私の学校から排除されたのだと話してくれた。別れ際に彼が「鄧小平は大嫌いだ!」と言っていたのが印象的だった。

その頃経験し感じたのは、とにかく中国人は自分の持っているポストを最大限に使って虚勢を張り、利益を得ようとするものである。例えば肉屋の店員が、自分の親族、友人に良い肉を回したり（この頃、肉は貴重品）、バスの車掌が知人からは、きっぷ代を取らなかったりと、例え小さな役職であっても利権に結び付けようとする。

私自身の経験でも、遠い親戚や、さして親しくない知人から、「今度日本に戻ったらラジカセを」と頼まれたり、担任の教師が、「テレビが欲しい」と家に来たり、帰り際には必ず、「このことは他の人には黙っていてくれ」という言葉を添え、そういう人たちに限って公の場では「私は党と人民のために!」などと言っていた。

三、プロパガンダに使われる

私たちが大連にいた70年代後半から80年代初期にかけては、まだ外国人が少なく、地元の

新聞社が母をはじめ、同じ学校にいる日本人の先生を取材したことがある。書かれた内容を見て、母は困惑した。「祖国の華僑子女に対する十分な配慮に、堀黎美先生はいたく感動し、よく人に『学費の免除のことだけをみても社会主義中国の優越性が分かる、資本主義の国ではお金がなければ何も出来ない。』」と書かれていたのだ。まず外国にいて、公の場所でむやみに、その国の社会体制の話などはしないし、こんな話は絶対記者にしていないと母は言っている。それに金銭面のことで言えば、この時期私は初級中学3年（日本の中学3年に相当）で、日本でも義務教育の期間である。中国の新聞はこのように作られるのだと認識した。

この日の新聞を懐かしく見ていると、母たちの記事のまわりには、“我更熱愛祖国”（私は更に祖国を愛す）、“祖国的富強就是青年的幸福”（祖国の富強こそ青年の幸福である）、“受到深刻的愛国主義教育”（深く刻み込まれた愛国主義教育）などの勇ましい記事が並び、その中の“我更熱愛祖国”は、「（中略）先生がかつて私たちに話してくれたことを思い出した、中国には林語堂⁹というのがいて、外国の物を崇拜し、外国にこびへつらい、彼は、中国はすべて外国に及ばず、外国は月だって中国よりも丸いと感じていた。当時、郭沫若¹⁰などの進歩的人士は林語堂の奴隸思想を批判する文を書いた。私たち20世紀80年代の中国青年は、革命的先人の精神を受け継ぎ、勇敢に立ち上がり、理想と知識で頭脳を充実させ、勤勉な労働により祖国を強く、豊かに建設し、祖国に我々がいることを誇れるようにしよう。」と書かれている。このころの記事は、社会主義＝善、資本主義＝悪で、安易に外国を賛美すれば、批判の対象になった。完全に資本主義となった今では、まるでブラックユーモアだが、母たちの記事もプロパガンダに使われたのだ。この頃、私たちに物を要求してくる人は、「隣が持っているから私たちも必要」と言っていた。とにかく自分が相手より下なのは、我慢ならず、違う世界の私たちに物を要求するのは、厚かましとも思わなかったようだ。多くの人が内心、外国の物質生活に憧れながら、表向きは「社会主義好！」（社会主義は良い！）と叫んでいるように見えた。

四、流氓文化

私は、大学卒業まで中国にいたのだが、卒業のころに出版された「醜い中国人」は当時大きな話題となった。台湾の作家、柏楊氏¹¹が書いたこの本は、中国の伝統文化を“漬物甕文化”（醬缸文化）と断罪し、どんな美しいものでも、この漬物甕に入れば腐ってしまい、日本人は一人なら豚だが、三人になれば龍になる。中国人は一人なら龍だが、三人になれば虫けら以下になると、中国人の団結心のなさを嘆き、中国人を蛆虫とこき下ろしている。この本は出版当時、批判に慣れていない中国人からは、不満の声も大きかったが、私は自尊心の強い中国でも、このような本が出版されることになり、うれしく思ったことを覚えている。（しかし、その後しばらくの間、発禁処分となる。）必要以上に自分を大きく見せようとするところや、その裏返しの劣等感、自らの役職、ポストを利用して利益を得ようとする体質など、私が感じていたことを、伝統文化の弊害として書き表してくれた。

その後中国は、天安門事件¹²の挫折があり、戒厳令を布いていた時期もあったが、近年の経済発展は周知の事実である。しかし天安門事件で威信のなくなった中国共産党は、江沢民の“歴史認識”¹³などで、日本を仮想敵とし、謝罪の要求と国内における“反日教育”を徹底させ、実際に戦争と縁のない若い世代に多くの“日本嫌い”を作り出したと日本では数多く報道されている。実際インターネットの書き込みで“我們是最偉大的民族”、“中華民族万歳”、“中華聖戦”などの文字が躍っており、“日本やアメリカを打ち負かせ”などと、“敵”が存在し、自分たちが上とす

る考えは以前と少しも変わらない。

金文学氏¹⁴はその著作「中国人民に告ぐ！」で中国には流氓文化の伝統があるとし、流氓（やくざ、ごろつき）は政府と密接につながっていると述べている。

人食いや文化大革命などもそうだが、反日デモで日本領事館に投石したり、その際同胞が経営する（日本人とは関係ない）日本料理屋を攻撃したり、自国の女優、趙薇（ビッキー・チャオ）が旭日旗を思わせる衣装を着て雑誌に載り、国民から大バッシングを受けたり¹⁵、台湾の歌手、張恵妹を“台湾独立派”とし、一時期中国大陆で活動が出来なくなったり¹⁶、中国の民衆は絶えず生贄を求めている。そして自分たちの統治に直接関係ないからか、中国政府もこれらの事はガス抜きとして黙認している。

五、再び常州

常州市の私の家の近辺では、ついに自殺者が出た。昨年12月7日、老婦人が首を吊った。警察は、遺書を持って行こうとしたが、住民の一人はすぐコピーを取らせたそう。渡したら最後、もう戻って来ないのが分かっているからである。中国では、“警匪一家”（警察と匪賊は一味）という言葉さえあるのだ。

取り壊し業者（拆遷公司）は夜、昼となくドアを叩き、監視カメラによって、住民の動きは監視され、多くの人が不安な気持ちで過ごしている。ある老人は「1平米4,428元（1元は、約14元）の保障で私たちにどうやって家を買えというのだ！新堂花園周辺の中古のアパートでも1平米6,000元に上がっている。」と説明した。

住人たちは取り壊しの保障だけでなく、その合法性にも疑いの目を向けている。住人たちから見て、彼らの家を取り壊して公共施設を作るわけでもなく、商業開発を行うのであり、そこで発生する巨大な経済利益は分け与えてはもらえない。

5～6社の取り壊し業者が、新堂花園に移ってきてから家主たちとの間で摩擦が絶えない。私の家がある永寧路北楼と従兄が住む新堂花園のアパート郡の多くは、90年代後半に建てられたものであり、中国の法律で70年の使用権が認められている。家主はみんな、《土地証》（土地の権利書）、《房産証》（不動産証書）を持っているにもかかわらず、常州市建設局、市土地準備中心組織は、“古く、危険な建築物”として一方的に取り壊しを決めてしまった。

私の従兄たちは不法だとし、立ち退きを拒否しているが、政府対庶民では、おのずから結果は決まっているであろう。すでに公務員をしているある住民は、職場で上司に呼び出され、立ち退きを要求され、泣く泣く家を明け渡した。

地方政府の横暴を中央に訴える場所はあるが、常州の知人は、「江蘇省の警察に連れ戻され、下手をしたら精神病院に入れられる。」と自嘲気味に話していた。

現在、常州で市政府と開発業者が癒着したこのような地上げは、私たちの地域だけではない。河田氏は“賓客”として副市長の言葉だけを一方的に聞かされたのであろうか。彼の話す、“近代化の成功を象徴する”、“中国で十指に入る豊かな都市”の実情とは、このようなものである。結局、これが、“中国の特色のある社会主義”であり、以前私が大連で会った同級生同様に弱い立場のものは排除されてしまう。

今、私は“外国人”なので、自由にものが言えるが、もし中国籍のままであれば、事後に降りかかる火の粉を考えると、とてもこのような文章は書けない。“漬物甕文化”は今も昔も変わらないのだ。

注釈

- ¹ 中華人民共和国の成立によって、人民は帝国主義、国民党、地主などから解放されたとされているので、建国前は“解放前”、建国後は“解放後”という。
- ² 中国では、中華人民共和国成立によって滅亡した国家ということになるが、国共内戦で敗れ、台湾に逃れた国民党政府は、中華民国政府を移し、今でも台湾では中華民国の国号を使い、住民は中華民国の国籍になる。
- ³ 特別な技能を持った専門家のこと。
- ⁴ 我々の父祖の地はここになる。
- ⁵ 現在、中国における主要都市、地区は、ほぼ開放されているが、以前は公安局から「外国人旅行証」を交付されなければ、行くことが出来ない都市が多くあった。
- ⁶ 中国国内で外国人との連絡や交渉、接待にあたるセクション。省市庁、機関、団体、大学などの一部に設置されている。
- ⁷ 中国では中学、高校を合わせて中学という。初級中学（日本の中学に相当）と高級中学（高校に相当）に分かれる。多くの場合一つの学校で、中高一貫のような形態になるが、一部には初級中学のみ、高級中学のみの学校もある。
- ⁸ 優秀な人材を集めて教育し、かつ教育内容、方法の開発、研究を推進するため、とくに教師や施設を集中的に充実させた、特定の学校。
- ⁹ （1895～1976）語学文学研究家、評論家、作家。福建省龍溪県出身。36年以降、主にアメリカで暮らす。近代の優れたジャーナリストであり、その鋭い時代感覚から文学史上、ユーモア文学、小品文文学を生んだが、文人趣味的傾向に傾く。英語が堪能で海外への自国民紹介に功績がある。
- ¹⁰ （1892～1978）作家、詩人、古代文学者。元中国科学院院長、中日友好協会名誉会長。四川省樂山県出身。22歳で日本へ留学し、六高から九州帝国大学医学部卒業。文化大革命では「自分の著作は全部、焼却してしまうべきだ」と自己批判して攻撃をかわす。一部には「風見鶏」との批判がある。
- ¹¹ （1920～2008）台湾の作家。本名、郭興邦で、後に郭衣洞と改名した。共産党の中国制圧後、台湾に渡り執筆を開始、上品な筆致による社会風刺が特徴で、小説や歴史書など多彩なジャンルの本を発表している。
- ¹² 北京市の天安門広場で起きた事件の総称。1976年（第一次）と1989年（第二次）に起こっているが、日本において、ただ単に「天安門事件」といった場合、第二次のものを指すことが多い。
第二次天安門事件は、1989年6月4日に民主化を求めるデモ隊と軍や警察が衝突、多数の死傷者を出した。中国では「六・四」といえばこの事件を指すが、公の場でこのことを口にする事は出来ない。

- ¹³ 江沢民は国家主席として訪日した際、歴史問題の訂正と謝罪を繰り返し日本に求め、強硬な立場をとった。
- ¹⁴ (1962～) 中国朝鮮族三世の作家、比較文学者。遼寧省瀋陽市出身。広島大学大学院博士課程修了、現在呉大学社会情報学部講師。「中国人民に告ぐ！」の他に「韓国民に告ぐ!」、「中国人による中国人大批判」などがある。
- ¹⁵ 中国の女優。アメリカ人カメラマンの要求に合わせ、旭日旗を思わせるデザインの洋服を着た雑誌が出版され、インターネットで“日本軍国主義の走狗”などと批判され、公式の場で謝罪した。にもかかわらず、その後彼女は、コンサート中暴徒に汚水をかけられ、殴られる被害に遭った。
- ¹⁶ 台湾の歌手。2000年、陳水扁総統の就任式に中華民国の国家を歌い、中国でコンサートやCM放送のボイコットに遭う。

引用文献

- 1、「中国建国60周年 格差のない豊かな町 常州」河田悌一 読売新聞（夕刊）2009年11月12日
- 2、「辛勤執教 情深誼長、大連外語学院日本専攻生活撮散記」 胡玉鋒 郝本發 楊芝順 遼寧日報 1980年6月2日
- 3、「我更熱愛祖国」 瀋陽九中卒業生 高繼梅 遼寧日報 1980年6月2日
- 4、「醜い中国人」 柏楊著 張良澤、宗像隆幸共訳 光文社 カッパ・ブックス 1988年 （原題：「醜陋的中国人」） 台湾林白出版社 1985年
- 5、「中国人民に告ぐ！」 金文学 祥伝社黄金文庫 2005年
- 6、「江蘇常州“拆遷逼人”事件調査」 《瞭望東方週刊》 記者、楊明奇 2009年12月31日 「財産征收与拆遷網」より

参考文献

- 1、「中国『愛国攘夷』の病理」 石平 小学館文庫 2002年
- 2、「トンデモ国家、中国の驚くべき正体 陳惠運 ゴマ文庫 2008年

(平成22年3月31日受理)